

Ⅱ 調査研究報告

- | | |
|---------------------------|----|
| 1. 伯耆における弥生時代伐採斧の基礎的整理 | 48 |
| 2. 妻木晩田遺跡における鉄器生産に関する覚え書き | 56 |

伯耆における弥生時代伐採斧の基礎的整理

1. 研究の現状と課題

弥生時代の磨製石斧の研究は、ヨーロッパ大陸の研究や民族例などを駆使して総体的に研究した佐原の研究成果によるところが大きい(佐原1994など)。また、佐原のような石斧の総体的な研究とは別に、日本列島の弥生社会を考える上で注目されるのが、生産と流通、石斧の系譜と変遷、などに焦点を当てた研究である。

今山遺跡における玄武岩製石斧の流通は、前期末から中期にかけて福岡平野だけでなく、約100km離れた地域まで流通していたことが明らかにされている(下條1975)。こうした北部九州を中心とした石斧の流通の問題は、原産地遺跡からの供給に主眼を置くことが多かったが、近年では消費地遺跡でのあり方も研究されるようになってきた(柏原2002など)。また、東北部九州や東海などの他地域においても、遺跡ごとの製品や未製品の出土状況、石材利用のあり方から生産と流通に関する研究がおこなわれている(梅崎1989など、佐藤2000)。

一方、地域ごとに磨製石斧の出現過程の分析も進められており、下條は東アジア出土の伐採斧を型式学的に検討し、日本列島への流入過程を分析している(下條2002)。また、日本列島出土の磨製石器の編年綱を地域ごとに検討し、北部九州から東部へ離れるに従い磨製石器の出現が遅れ、それに伴い石器から鉄器への転換も遅くなる傾向を指摘している(下條1994)。このうち太型蛤刃石斧について、下條のA1、A2類は北部九州を中心に分布し、板付Ⅱa式以降に出現するとされるA3類が各地域で自生してくるという変遷を示した。これに対し、中部瀬戸内や高知における磨製石斧の出現過程では、弥生時代開始当初からA3類に該当する太型蛤刃石斧が存在することが指摘されている(平井1992、出原1999)。さらに中・西部瀬戸内と大阪湾沿岸地域の縄文時代晩期から弥生時代前期の磨製石斧を研究した寺前によると、太型蛤刃石斧は700g前後を境に、出現過程に差があるという(寺前2001)。

このように周辺地域では、着実な研究成果が蓄積されている。一方鳥取県では、梅原による柱状片刃石斧に関する研究以降は(梅原1922)、あまり活発に取り上げられることはなかった。その後、下條や平井が、鳥根県西川津遺跡の資料を取り上げて、山陰の伐採斧は北部九州に比べて、小型であることなどを指摘している(下條

1989、平井1991)。しかし、鳥取県内の資料はあまり評価されているとは言えない状況である。

近年の発掘調査で、妻木晩田遺跡は各地域で石器が激減するとされる後期後葉に最盛期を迎えることが明らかになったが、鉄器だけでなく多くの石斧が出土している。また、県内では妻木晩田遺跡だけでなく青谷上寺地遺跡からも多量の石器や鉄器が出土しており、石器から鉄器への転換形態や、生産と流通にも大きな関心が寄せられている。そこで本稿では、妻木晩田遺跡を中心とした弥生時代後期の石器のあり方を明らかにするため、まず、伯耆(鳥取県中・西部)における伐採斧の変遷と特徴を明らかにする。そのうえで、伐採斧の出土状況や石材利用のあり方から生産と流通について若干の考えを述べることにする。

2. 伐採斧の分類

伐採斧の平面形態と横断面形態による分類を行い、伯耆における変遷を明らかにする。本来なら基部形態も分類要素として取り上げるべきだが、欠損資料が多いため今回は取り上げなかった。対象とする資料は、時期を特定できる遺構や包含層出土の資料を中心に、必要に応じてその他の資料も取り上げることにする。

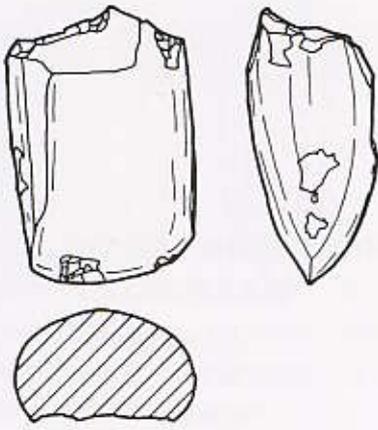
平面形態はⅠ～Ⅲ類に分類する。Ⅰ類は両側縁が概ね平行または中央部に若干膨らみをもつもの、Ⅱ類は刃部に最大幅があり、基部に向けて細くなるもの、その他のものをⅢ類とする。

横断面は最大幅と最大厚の比率(厚さ÷幅=厚斧率²⁾)と横断面形態で分類する。A類は円形ないし厚い楕円形で厚斧率80～70%前後、B類はA類に比べてやや扁平な楕円形で厚斧率70～60%前後、C類は側面や主面に平坦面をもつものである。

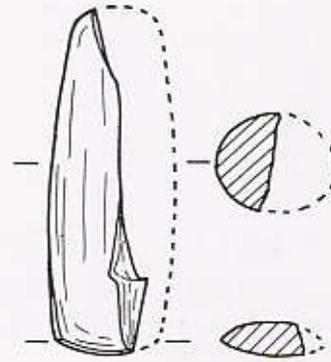
3. 伐採斧の変遷²⁾

前期の様相

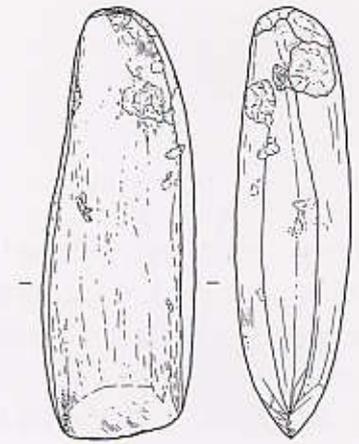
遺構から出土した資料は3遺跡6点ある。長瀬高浜遺跡出土資料は土坑と竪穴住居跡から、大塚岩田遺跡、天王原遺跡出土の資料は、溝および環壕から出土した資料である。これら6点のうち、最も古い石斧は、長瀬高浜遺跡SK03出土の石斧で(図1-1)、前期前半(Ⅰ-2期)に属する。基部側を欠損しており、基部形態は不



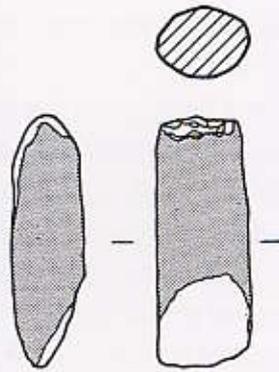
1 長瀬高浜遺跡SK03



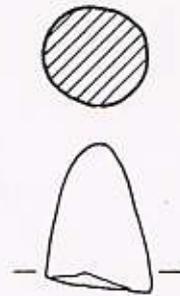
2 長瀬高浜遺跡SI113



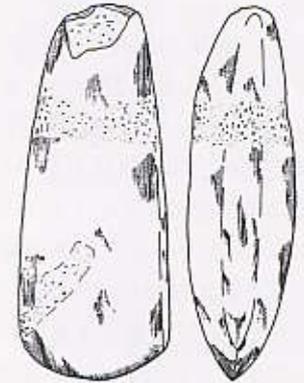
3 大塚岩田遺跡SD7



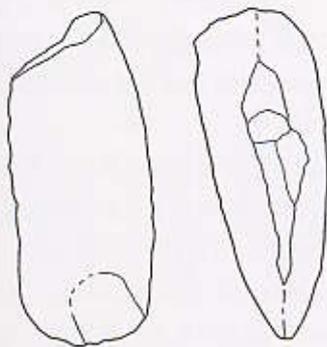
4 天王原遺跡



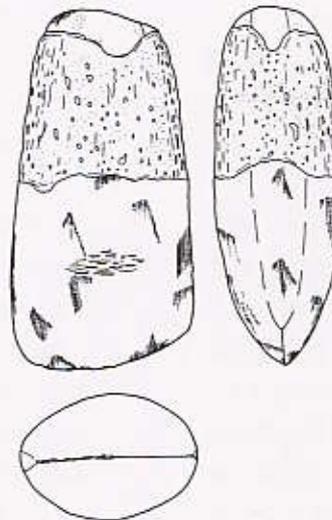
5 天王原遺跡



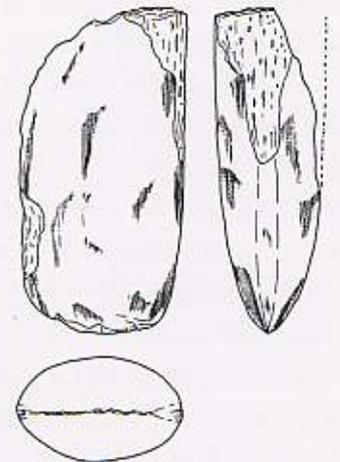
8 長瀬高浜遺跡



6 目久美遺跡



7 長瀬高浜遺跡



9 長瀬高浜遺跡



図1 前期の伐採斧

明だが、主面全体を丁寧に研磨した資料で、断面も厚い楕円形を呈しておりⅠA類に分類できる。次が前期後半に属する長瀬高浜遺跡S I 113出土の石斧(図1-2)である。身の右半分を欠損しているが、ⅠA類に分類できる。S K 03に比べると刃部幅も狭く小ぶり、主面中ほどから側面にかけて研磨が若干粗くなり敲打の痕跡が残っている。大塚岩田遺跡、天王原遺跡はどちらも環壕を伴う遺跡で、大山山麓地域では前期末(Ⅰ-4期)に環壕が出現することが指摘されており(濱田2002)、検出された遺構の時期から、これらの石斧も概ねⅠ-4期と考えられる。大塚岩田遺跡出土の石斧はⅡA類である(図1-3)。天王原遺跡で伐採斧と報告されている石斧は、ⅠA類とⅡA類に分類することができる(図1-4・5)。これら以外に、米子市目久美遺跡で前期土器を中心とする包含層からも伐採斧が出土している。目久美遺跡出土の石斧は刃部から基部にかけて湾曲し、横断面は厚い楕円形をしておりⅢA類に分類できる(図1-6)。刃部を中心に研磨が施されているが、主面のほとんどと側面は敲打痕跡が残っており、かなり研磨が省略されている。長瀬高浜遺跡からも、出土状況は不明だが、完形品2点を含む5点が報告されている。検出されている弥生時代の遺構が前期であることから概ね前期の時間幅の中に収まる可能性が高い資料である。分類可能な3点はⅠA類1点(図1-9)とⅡA類2点(図1-7・8)である。

全体的に見て、前期の石斧はⅠA類主体である。最も大きい石斧は、ほぼ完形の長瀬高浜遺跡の石斧で、長さ17.4cm、重さ790gである。長瀬高浜遺跡から出土したほぼ完形の石斧が長さ14.2cm、14.9cmで、全体的には17cm~14cm台の資料が多いように考えられる。また、多くの資料は刃部を中心に研磨が施されており、側面や主面の中程から基部にかけては研磨が省略または粗く施される傾向がある。全面に研磨が施されていると考えられるのは長瀬高浜遺跡S K 03出土資料などで、形態的にも他遺跡の資料と比べてかなり整っている。

中期の様相

中期前葉に属する資料は少なく、宮尾遺跡と古市流田遺跡で報告されている。古市流田遺跡の石斧は刃部のみが出土しており、全体形状などは不明である。

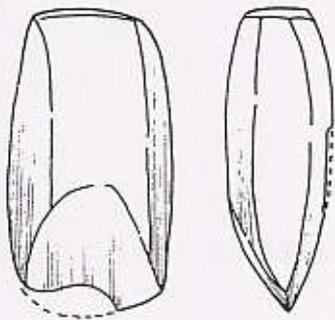
中期中葉に属する資料は3遺跡3点(越敷山遺跡S K

32、小野越城野原第1遺跡段状遺構4の柱穴内、下山南通遺跡S K 38)である。小野越城野原第1遺跡の資料は刃部だけの資料で詳細は不明である。越敷山遺跡S K 32は基部を除くほぼ全面に研磨が施され、横断面はやや扁平でⅠB類(図2-1)、下山南通遺跡S K 38の石斧はⅠA類である。中期後葉には、越敷山遺跡S I 02と林ヶ原遺跡S I 08(図2-2)、天王原遺跡S I 02(図2-3)、鶴田合清水遺跡S I 04(図2-4)、東宗像遺跡S I 08などで出土している。前期以来主要な位置を占めてきたⅠA類に加えて、ⅠB類が増加し、鶴田合清水遺跡のように主面に平坦面を形成するⅠC類が出現している。また、天王原遺跡ではⅡA類が出土している。

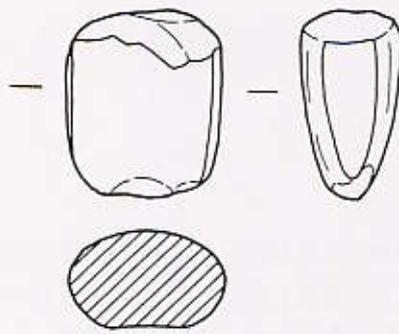
中期中葉から後葉の包含層出土資料としては、茶畑山道遺跡や長山馬籠遺跡がある。長山馬籠遺跡ではほぼ完形の石斧2点が報告されており、完形品のⅠC類(図2-5)とⅡA類である。茶畑山道遺跡からは6点が出土している。ⅠA類が2点(S 44、S 39)、ⅠC類が2点(図2-7)、ⅡA類が2点(図2-6)である。

これらの他に、未製品が長山馬籠遺跡(図2-8)と越敷山遺跡19a区S I 06(図2-9)から出土している。長山馬籠遺跡の資料は調整剥離段階の資料で、刃部側が薄くなるように剥離されているが、刃部よりも基部の方が幅広くなっている。越敷山遺跡の資料は、研磨途中段階の資料で、両主面と片側面の一部にのみ研磨が施されており、研磨が及んでいない部分は敲打の跡が残っている。研磨された部分は平坦面を形成しており、横断面に面を形成している。刃部の先端部分は未研磨の状態、刃部の研ぎ出しは行われていない。

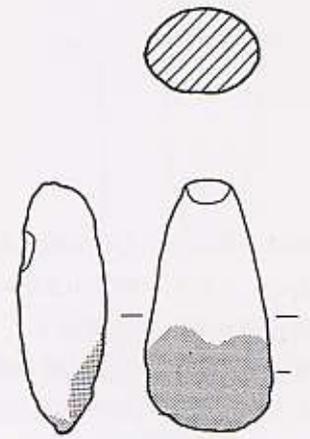
茶畑山道遺跡や長山馬籠遺跡などの包含層出土資料を含めて考えると中期中葉にはⅠB類やⅠC類が増加することがわかる。大きさの面では、ほぼ完形で出土している石斧でも、茶畑山道遺跡出土の石斧は11.8cm、重さ417g、他の1点は11.5cm、436gである。未製品と考えられる越敷山遺跡の石斧は、長さ12.2cm、重さ480g、長山馬籠遺跡は長さ11.73cm、重さ352.5gである。資料数は少ないが、未製品でも長さ12cm前後であることから、前期よりもさらに小型・扁平化が進んでいると考えられる。厚斧率が60%前後のB類やC類が増加する背景には、素材そのものが扁平化していることが挙げられる。また、横断面を円形や楕円形に研磨するには、主面と側



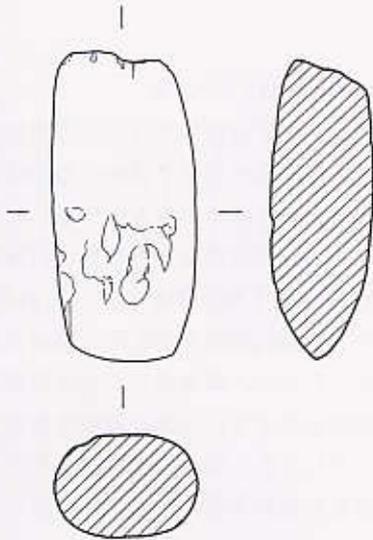
1 越敷山遺跡 SK32



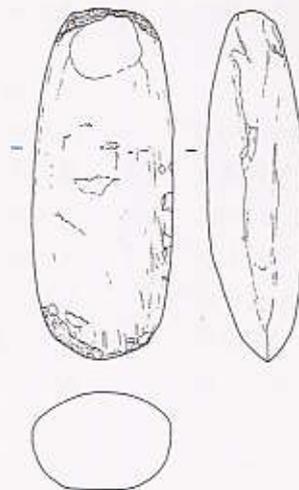
2 林ヶ原遺跡SI08



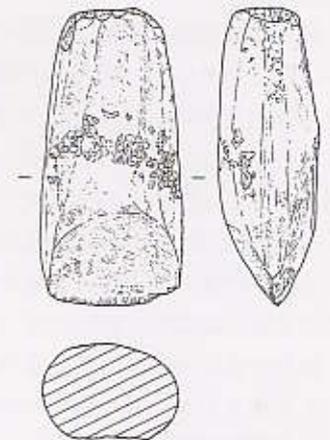
3 天王原遺跡SI02



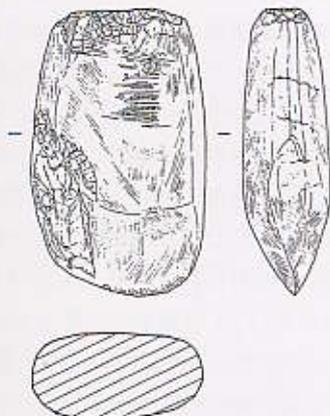
4 鶴田合清水遺跡SI04



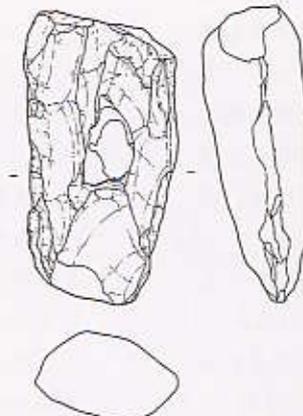
5 長山馬籠遺跡



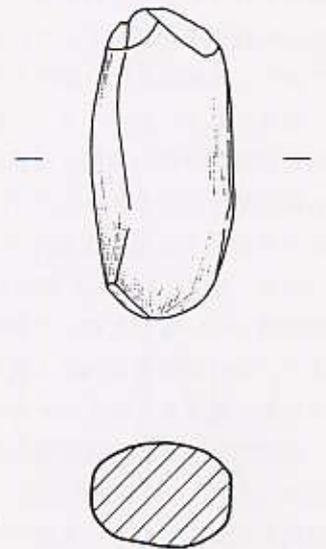
6 茶畑山道遺跡



7 茶畑山道遺跡



8 長山馬籠遺跡



9 越敷山遺跡19a区SI06

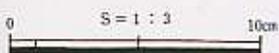


図2 中期の伐採斧と未製品

面は一体のものとして境界部分も十分に研磨する必要がある。しかし、越敷山遺跡の未製品のように、主面と側面にそれぞれ面を形成するように研磨を行うものもあり、C類の一部には主面と側面を別々の面として研磨するという製作技術の簡略化があった可能性が考えられる。さらに、主面や側面の一部に不定形な平坦面を持っているものは、調整剥離や敲打段階の形態を大きく変えない程度に研磨を留めているものと考えられる。

後期の様相

後期の資料は、ほとんど妻木晩田遺跡出土のものである。後期前葉には、妻木晩田遺跡の妻木新山地区の竪穴住居跡と土坑から合わせて3点の石斧が出土している。S I 42 (図3-1)とS K 172から出土した石斧はI B類で、S K 132から出土した石斧はI C類である(図3-2)。S K 132資料は、横断面形態がおむすび形を呈している。他の2点は刃部を中心に研磨されており、側面や主面には敲打の痕跡が良く残っている。

後期中葉には妻木晩田遺跡の松尾頭地区のS I 06 bから1点出土している(図3-3)。基部を欠損しているが、I B類である。刃部以外はかなり敲打痕が残存している。

後期後葉にはI A類からI C類が揃っているが、I B類およびI C類が主体になっている。松尾頭地区SK101出土の石斧は刃部半分だけの資料だが、丁寧に研磨されており、横断面も厚い楕円形を呈しているため、I A類と考えられる(図3-5)。また、細粒砂岩製で妻木晩田遺跡出土の他の資料とは使用石材も異なっている。妻木新山地区のS I 06から出土した石斧は、横断面が隅丸長方形を呈する扁平な石斧で、厚斧率は55.0%のI C類である(図3-4)。左側面は縦割れを起こした後、再度研磨しているようで、刃部幅が狭くなっている。また、他に東郷町宮内第4遺跡や倉吉市福庭遺跡からもI C類に属する可能性のある石斧が報告されている。

後期には洞ノ原地区西側丘陵のピットから未製品が1点出土している(図3-6)。研磨途中段階の資料で、裏面を欠損している。表面中央部と側面は敲打の痕跡が良く残っているが、それ以外は研磨されている。刃部の研ぎ出しは行われていない。長さは10.6cm、重さ435.9gの資料である。

終末期には越敷山遺跡の竪穴住居跡から基部のみが報

告されているが、確実な伐採斧は今のところほとんど見つからないようである。

中期から後期にかけて、厚斧率は50~60%前後が中心となり、80%台の石斧はほとんどなくなることから、扁平化が一層進むと考えられる。大きさはほとんどが欠損資料のため定かでないが、中期と同程度の長さだったと考えられる。

4. 伐採斧の生産と利用石材について

比較的多くの伐採斧が出土する前期から中期の拠点集落と考えられる米子市長砂遺跡や日久美遺跡の様相はどうであろうか。石材名が記載されているものでは、閃緑岩、泥岩、砂岩、安山岩、黒色頁岩などの多様な石材が利用されている。形態的にもI類II類が混在しており、特定石材を利用したり、特定の形態を集中的に利用または生産する傾向は認められない。黒色頁岩や大塚岩田遺跡で利用されている流紋岩のように一部に他の集落から入手した石材があったとしても、多くは集落近くの河川流域で採取可能な石材を利用して生産していたと考えられる。

中期の茶畑山道遺跡では、伐採斧6点の他に加工斧7点など複数の器種が包含層からまとまって出土している。伐採斧の形態も多様で、1遺跡内で複数の石斧が出土する場合でも、同じ形態の石斧が出土することは少ないようである。破損による変形も考慮しなければならないが、I類の場合は、刃部の研ぎ直しをしても、全体形状が大きく変形することは少ないであろう。また、横断面形態は破損して変形する可能性が低い属性である。伐採斧の未製品は長山馬籠遺跡、越敷山遺跡の2例のみだが、未製品が出土するこれらの遺跡においても、調整剥片や未製品がまとまって出土することはない。後期の妻木晩田遺跡では時期不明のものも含めて22点の伐採斧と加工斧が出土している(表1)。1遺跡からの出土量としては、この地域では決して少ない数ではない。むしろ、前期や中期の遺跡においても、20点以上の石斧がまとまって出土することは極めて少ないのである。緑色片岩や閃緑岩、安山岩をはじめとして6種類以上の石材が利用されている。緑色片岩が他の石材に比べて多少多く利用されているが、特定石材を選択的に利用する傾向はみられないし、形態的な統一性も認められない。また、遺跡

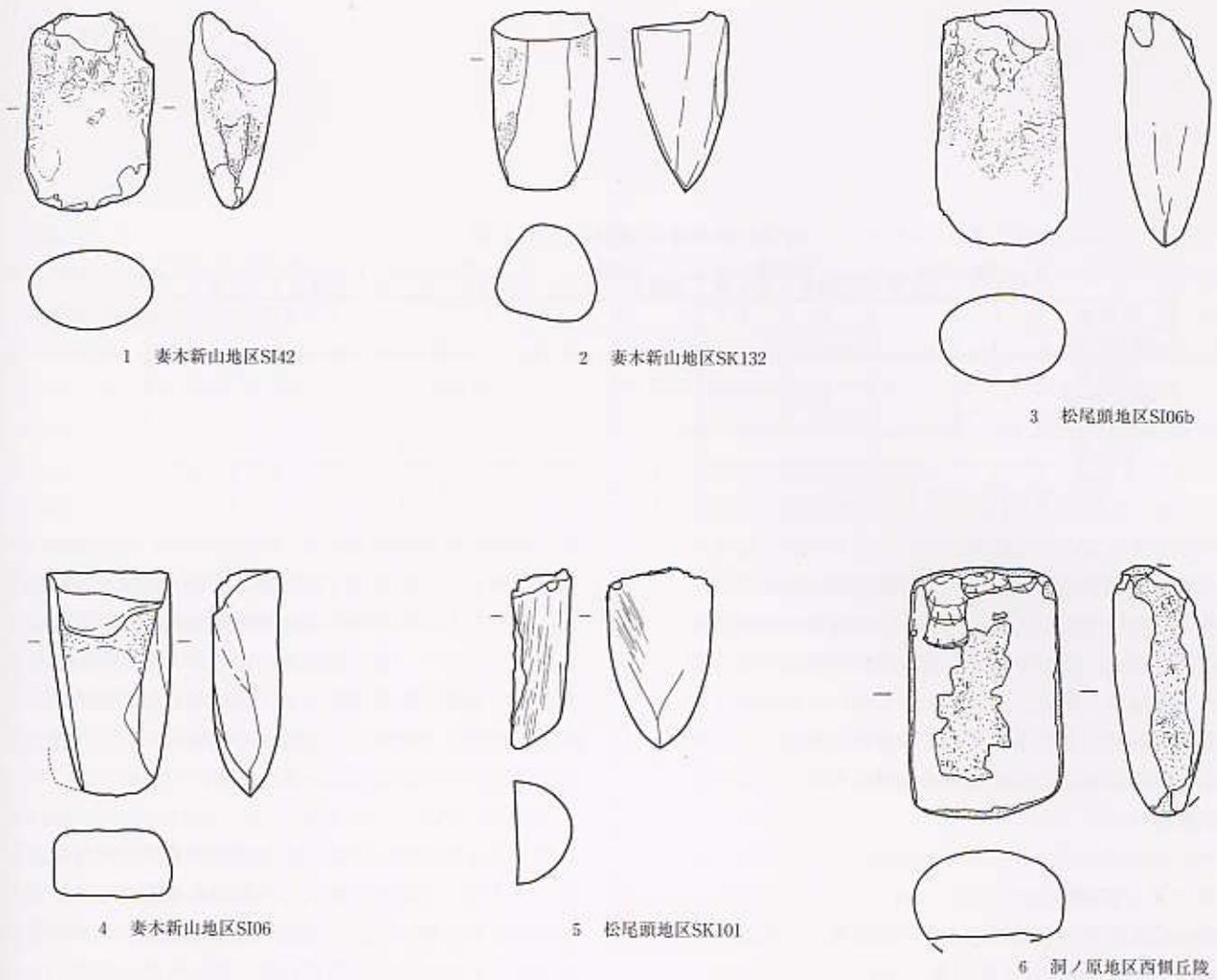


図3 後期の伐採斧と未製品

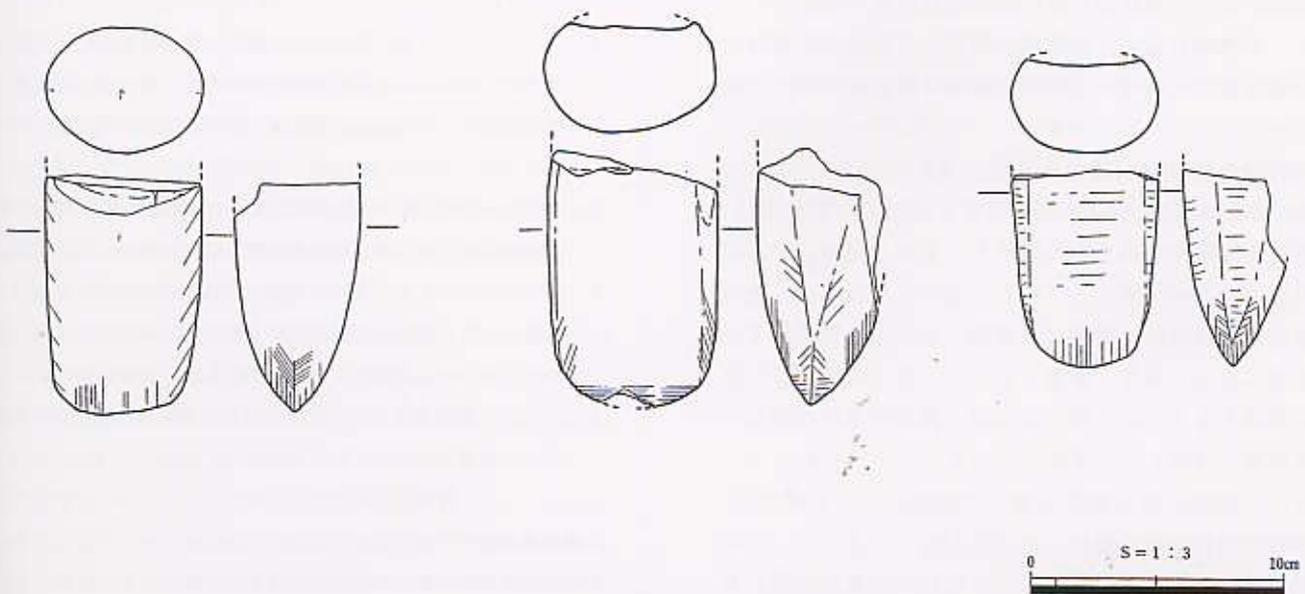


図4 石州府古墳群出土の伐採斧

表1 妻木晩田遺跡出土の石斧

	妻木新山		松尾頭		松尾城		妻木山		洞ノ原		合計
	伐採斧	加工斧	伐採斧	加工斧	伐採斧	加工斧	伐採斧	加工斧	伐採斧	加工斧	
安山岩	1		1	1			1		1		5
緑色片石	3		1								4
閃緑岩	2										2
細流砂岩			1				1				2
泥質片岩	1										1
凝灰岩								1			1
その他	3	1			1				1	1	7
合計	10	1	3	1	1		2	1	2	1	22

内での出土状況は、1居住単位³⁾に1～2点で、特定の居住単位からまとまって出土する傾向は認められない。報告書や資料を実見した限りでは、この地域の伐採斧はいずれも日野川上流域や大山山麓に産地が推定される緑色片岩、閃緑岩、安山岩、蛇紋岩の4石材を利用する頻度が高いようである。また、特定の石材を利用して、伐採斧を集中的に生産している遺跡や居住単位も現状では確認出来ない。

5. まとめと課題

伯耆の伐採斧を中心に検討を行った結果、出現時期は前期前半、そして終末は後期後葉に求めることができる。確実に縄文時代晩期に遡る資料は報告されていないが、出現期の様相に関する参考資料として縄文時代晩期末(古海式)に属する可能性が紹介されているのが、石州府古墳群出土の石斧である(濱田2001)。殆どの資料が基部を欠損しているが、I A類で構成されている(図4)。両側縁が平行で横断面が厚い楕円形ないし円形を呈しており、刃部幅も広い。石州府古墳群の石斧は出土状況など不明な部分も多く⁴⁾、同様な資料の増加をまって、改めて検討したい。

時間的な変化は、横断面形態に良く反映されている。前期以来円形ないし厚い楕円形を呈していた横断面は、中期中葉以降やや扁平な楕円形や、主面や側面に平坦面を形成する方向へ変化していく。こうした状況は、素材の変化や製作技術の簡略化と連動しながら後期以降さらに顕著になる。長さ・重量といった大きさの面では、平井が指摘するように小型であるが、前期中葉に出現して以降中期には徐々に小型化していることがわかる。

また、使用石材と形態分類との関係から、伯耆では、北部九州の伐採斧や畿内における石包丁のような、生産体制や流通構造は認められない。むしろ吉備の中期にお

ける磨製石斧の生産と流通⁵⁾(高田2001)や下條のいう伐採石斧Bのあり方(下條2003)に近い状況を想定できる。ただし、島根半島に産地が推定される黒色頁岩(山名1986)などの一部の石材や、非常に丁寧に研磨された妻木晩田遺跡松尾頭地区出土の細粒砂岩製の伐採斧、長瀬高浜遺跡出土資料などは遺跡の性格も含めて今後さらに検討しなければならないだろう。

資料の実見に際しては、以下の関係機関にお世話になった。また、本文中で使用した図は各報告書より転載した。会見町教育委員会、大山町教育委員会、名和町教育委員会、羽合町歴史民俗資料館、溝口町教育委員会、米子市教育文化事業団

(馬路晃祥)

註

- 1) 厚斧率という用語は、下條信行2002「北東アジアにおける伐採石斧の展開」西谷正編『韓半島考古学論叢』すずさわ書店、に準じる。
- 2) 時期区分は本年報の時期区分および、濱田竜彦2003「大山山麓地域における弥生時代後期土器の編年」濱田編『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書—洞ノ原地区西側丘陵の調査—』、222-235頁を参照。
- 3) 高田健一2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」馬路編2003「妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002」を参照。
- 4) 報告されている弥生時代の遺構は土坑1基のみで、遺物は伴わないようである。弥生時代の遺物として報告されている資料は、砥石のみであり、土器は1点も報告されていない。
- 5) ただし、南方遺跡出土のヒン岩製の太型蛤刃石斧は、南方遺跡から流通していた可能性を指摘している。

主要参考文献

新井宏則編1993「天王原遺跡発掘調査報告書」会見町教育委

- 員会
- 岩田文章編2000「妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群
発掘調査報告書」淀江町教育委員会
- 梅崎恵司1989「北九州域における大陸系磨製石器の生産と流通」
『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会、125-
172頁
- 梅原末治1922「鳥取県下に於ける有史以前の歴史」鳥取県史蹟勝
地調査報告1
- 岡野雅則編2001「大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡」財団法人 鳥取
県教育文化財団 国土交通省 倉吉工事事務所
- 小原貴樹・下高瑞哉編1989「石州府古墳群発掘調査報告書」米子
市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団
- 柏原孝俊2002「北部九州における弥生時代磨製石器の様相-集
落遺跡出土の「今山系石斧」とその供給形態-」『環瀬戸内海
の考古学-平井勝氏追悼論文集-』上巻、521-537頁
- 佐原真1994「斧の文化史」考古学選書〔6〕、東京大学出版会
- 佐藤由紀男2000「駿河湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流
通」『考古学論究』第9号、考古学研究会、59-74頁
- 下條信行1975「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研
究』22巻1号、7-21頁
- 下條信行1989「鳥根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と
北部九州」『西川津遺跡発掘調査報告書・(海崎地区3)』鳥根
県教育委員会325-340頁
- 下條信行1994「弥生時代・大陸系磨製石器の編年綱の作製と地域
間の比較研究」
- 下條信行1998「『石器の盛衰』『日本における石器から鉄器への
転換形態の研究』5-62頁
- 下條信行2002「北東アジアにおける伐採石斧の展開-中国東北・
朝鮮半島・日本列島を繋ぐ文化回路を巡って-」『韓半島考古
学論叢』すずさわ書店、125-156頁
- 下條信行2003「弥生時代における縄文的生産流通と弥生的生産流
通」『道具の生産流通と地域関係の形成 研究発表要旨』古代
学協会中国四国合同大会、65-83頁
- 高口勝人他編1984「久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘
調査報告書」財団法人鳥取県教育文化財団
- 高田浩司2001「吉備における弥生時代中期の石器の生産と流通」
『古代吉備』第23集、25-52頁
- 辻信宏編1999「茶畑山遺跡」名和町教育委員会
- 鳥取県教育文化財団編1983「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V」
- 鳥取県教育文化財団編1983「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI」
- 中原齊編1989「長山馬籠遺跡」溝口町教育委員会
- 中原齊編1994「越敷山遺跡群」会見町教育委員会・岸本町教育委
員会
- 西川徹編1995「鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡」財団法人鳥取県
教育文化財団
- 濱田竜彦編1998「日久美遺跡V・VI」財団法人米子市教育文化事
業団・米子市公園街路課
- 濱田竜彦2000「山陰地方における弥生文化成立期の様相-山陰東
部を中心に-」『弥生文化の成立-各地域における弥生文化成
立期の具体像-』第47回 埋蔵文化財研究集会、55-74頁
- 濱田竜彦2001「鳥取県・西伯善地域(阿弥陀川以西)」『山陰地
域における弥生時代前期の地域相-資料集-』第3回 西伯善弥
生集落検討会、127-189頁
- 濱田竜彦2002「伯耆の国の環塚」馬路晃祥・濱田編『日本海をの
ぞむ弥生の国々-環塚から見える弥生社会とは?』鳥取県教
育委員会
- 濱田竜彦編2003「史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書-洞ノ
原地区西側丘陵の調査-」鳥取県教育委員会
- 平井勝1991「弥生時代の石器」考古学ライブラリー64、ニューサ
イエンス社
- 平井勝1992「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究(上)』山
陽新聞社 19-50頁
- 出原恵三1999「南西四国の石器-弥生時代の磨製石器を中心とし
て-」『古代吉備』第21集、3-41頁
- 寺前直人2001「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷-中部瀬
戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として-」『古文化談叢』第
46集、27-52頁
- 松本哲他編2000「妻木晩田遺跡発掘調査報告I~IV」大山スイス
村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 山名巖1986「日久美遺跡から出土した石器類の岩質について」小
原他編『日久美遺跡』米子市教育委員会・鳥取県河川課